

二年時での印象深い記憶に、現代国語の授業でのエピソードが思い出される。記憶によれば確か京大出身のリベラルな女性教諭の「現代国語」の時間は面白くて、私の好きな授業の一つであった。教科書から逸脱した彼女なりの視点からの[テーマ]を毎回プリントにしては持ち込んできて、生徒に難問、奇問を投げかけては、白熱した討論で盛り上がることの多かった授業だ。

ある時、例に漏れず配られたプリントを一読すると、タイトルは忘れたが、日本で差別を受けながら、貧しくも逞しく生きる在日韓国人母子家庭を描く内容だった。女性教諭は配り終えたプリントに課題を与え、我々に原稿用紙二枚以上の読後感想文を一週間後に提出するように、授業を締めくくった。授業中何度も目が合い、明らかに私を意識しての授業に違いないと私は確信し、課題を家に持ち帰った。本名で在籍する珍しい目立った生徒のお手並み拝見とばかりニタツと私に笑みを投げた女性教諭の顔が忘れられず、私も腹を据え、何度も何度も課題のプリントを読み返した。小学校時代の仲間たちの面々が思い出されるくらい、私には異次元の差別でも何でも無く、現実の回想であったし、貧しさのレベルや逞しさのレベルも、違和感なく日常の中での一コマでしか感じない程の現実感のある課題プリントだった。逆に、小学校の同胞の仲間を隅々まで知り尽くしていたので、面白くもなく不愉快な気分にもなっていた。そんな劣悪な環境でもそれなりに仲間との過ごした時間は幸福だったし、何よりも楽しかったからだ。私はむしろ差別を生む土壤に疑問を呈する気持ちで、急に読後感想文の課題を自分に新たな命題だと、課したい気持ちになっていた。それからというもの、背中から付き押されるように一気に作文を書きあげて、気が付けば夜が明けて、原稿用紙15枚ほどにビッシリと怒りの文字が収まっていた。

自分の中でのモヤモヤも少し晴れたぐらいの読後感想課題だったので、提出した際私の枚数の多さに周囲の冷やかに少しの気恥ずかしさはあったが、自分の命題をやり遂げた達成感が有った。

一週間後の[現国]の授業が開始した直後だった。リベラルな女性教諭は、壇上からいきなり私を名指した。

私に壇上から前の課題作文を発表しろ、とのことだった。まさかの展開に一瞬躊躇したが、クラスメイト全員からの熱い視線と喝采に、場を覆すことは出来なかった。自分への新たな課題を見出したので、私なりの[差別観]を原稿用紙に書き殴っただけの中身を、改めて人前で発表するのは想定していなかった。意を決し壇上に上がり私は滔々と読み上げていた。途中、私の朗読に、教室のあちらこちらから、生徒のすすり泣く声が聞こえてきた。間を置けわけにもいかず、すすり泣く声の重なったピークで、私の朗読は終わった。拍手喝采の中を仲間たちから称賛の冷やかしを受けながら席に戻っていくと、騒ぎを鎮めるようにリベラルな女性教諭がクラスの皆に言い放った。皆、朴君の作文どう思う? 朴君は、我々に新たなテーマを投げたよねえ…。この後はフリーにするから皆で自由に討論して[差別]についてちょっと考えてみようか? 朴君みたいなテーマ投げをスルーするのは勿体ないし、このクラスに居る朴君のお陰で、凄い授業ができるのよ!

是非最後まで皆でしっかり考えを纏めていこう』と言い残し、女性教諭は教室を出て後にした。

教諭のいない教室で、まず起こったのは数人の女生徒が私に詰め寄り、発表した作文の中身の更なる追及だった。

私の作文を掻い摘んで要約すれば、在日差別の根幹や問題点よりも、日本そのものの土壤に潜む陰湿な差別観の根幹として[被差別部落]の問題の方が、更にやるせない(根の深い差別観の土壤になっている…)との指摘であった。

究極を言えば、在日の被差別意識は、異国での差別観を享受して理解し転換可能であり、個の生き方如何によって、回避も克服も可能であるが、同和差別の根の深さは、日本で生まれ日本人としての権利を有しながら、日本人としての尊厳を守られておらず、しかも顕在化して論じられることも少なく、幼少の頃から潜在的にアンタッチャブルな刷り込みを親世代から引き継ぐことも多いので、陰湿に根深く誤解と差別意識だけが独り歩きしている現状を指摘し、とりわけ問題点としてテーマを投げかけたのだ。換言すれば、在日差別よりも同和差別の方が救われない現実が有り、そこに目を向けない限り日本の差別問題は解決しない単なる絵空事だ、とテーマを投げたのだ。それには、中学の時に私が経験した差別問題で衝撃的なことも起因している。当時、仲間と地域を徘徊しながら、新しいテリトリーの開拓に幾度となくある地域を促しても、絶対に仲間たちが避けた地域が有ったことに疑問を呈し、その返答に驚いたのだ。『そこは部落やから、絶対に行ったらアカンねん。行ったことがババたら親に怒られるねん。』『なんで部落やったらアカンのや?』と聞けば、『わからん』とだけ返事するだけ…。

何か別世界がある様に感じられ、非常に違和感を持った記憶が私の原体験に有ったので、在日差別とは違った異質な差別感情に驚きを隠せなかった。また、それを契機に母の蔵書に有った『橋のない川』(住井すゑ著)を全巻読破して得た、被差別部落の歴史的背景などの悲哀や人間の本質的感情の残酷さなども感じていたからかも知れない。私に詰め寄り、更に質問を浴びせた女生徒が被差別部落地域の中学出身者であった事に、私は逆にこれまで聞きたかった事も含め大いに議論し質問して、女生徒が泣きながら訴える悲痛な内容を脳裏に刻むことが出来たことで、正しく交わり認識を深く広めることの大切さに気付かされた。誤ったバイアスを掛ける親の役割が如何に大切かも痛感した。差別する、差別される、二つの世界が存在するなら行き来できる[橋]になれる存在でありたいと強く意識した瞬間でもあった。その橋は、人間の尊厳を守る橋なのである。 [次回につづく]

高校生活は、あっという間だ。数々の出逢いと別れを経て青年期へと成長していく礎になる。特に多感な時期での経験は、その後の人生の核にもなり得る。出逢いは、人のみとは限らない。人生の師と仰いだ先生との突然の別れと、茫然自失な日々…。目標を失いかけた時に、出逢った私のメンターであり憧れの師。そして、その後の人生を歩む上での[背骨]に注入された書との出逢い…。大学受験の挫折と青年期への復活の烽火を掲げるまでの紆余曲折は、次回へつづく…。